

動き出す学校と先生たちの実践レポート

アクティブラーニング

AL型授業への挑戦

昨年末、中央教育審議会が発表した高等学校教育の改革答申以来、注目を浴び始めているアクティブラーニング型授業(以下「AL型授業」)。個人として取り組みは始めている先生は増えてきているものの、学校組織としての取り組みは今後期待されるところです。この連載では学校をあげてAL型授業に取り組みは始めている学校をご紹介します。今回は、北海道の旭川藤女子高等学校をご紹介します。

企画協力/小林昭文(産業能率大学 教授) 取材・文/長島佳子 撮影/瀧野幸太郎



第2回

旭川藤女子高等学校(北海道・私立)

School Data

1953年創立/全日制普通科/生徒数257人(女子)/進路状況(2014年度実績)大学46人、短大14人、専修・その他15人、就職7人



谷島久雄 副校長(左)

1985年、千葉県の実立高等学校の教員を経て1999年より旭川藤女子高校に転任。2005年に教頭、2012年より副校長に就任。現場を率いて授業改革に取り組んでいる。

宮本 学 教頭(右)

1992年に教員就任と同時に旭川藤女子高等学校に着任、2012年より教頭に就任。谷島副校長とともに現在も教壇に立ちながら、授業の質を高める学校改革を進めている。



学び改革を掲げた昨年度の学校案内

すべての教員に役割を持たせて
短期間での授業改革を推進

管理職が現場教員とともに
苦しみ考えて 試行錯誤する

少子化による入学者数の減少。日本全国の高校と同様に旭川藤女子高校もその課題を持ち、待たなしの改革を迫られていた。「その場のしでなく、魅力的な学校にする持続可能な改革が必要です。学校の本分は授業ですから、授業の質を变えることが本校の改革であるべきだと考えました(谷島先生)。」

2011年から着手した学校改革を翌年からは授業改革に主軸を置いた。情報収集や外部研修を行い、13年の秋に「学びの改革」と銘を打ち、14年度からはAL型授業を中心とした70分授業を行うことに決定した。同

時に、生徒全員にタブレットを配布し授業に導入。同校の学校案内には「教師による一方通行授業は全面的に廃止」とまで明記されている。「激変する社会環境の中で、自分を変えて成長していける生徒に育てることが現在の教員に求められています。そのために、生徒たちが自ら進んで学び合う方法を探し、AL型授業に行き着いたのです(宮本先生)。」

旭川藤女子高等学校のAL型授業への取り組みの歩み

旭川藤女子高校では、2011年に学校改革を始め、組織やカリキュラムの見直し、ICTの導入などを行ってきたが、「改善」に留まらない「抜本的な改革が必要」と決断し、2014年からAL型授業を中心とする70分制という授業改革を実現した。過去2回、小林昭文先生によるAL研修を行っているが、3月の研修では地域の100名近い小中高大や塾の教員などを招待し(写真)、外部からも取り組みに対する評価を受けている。生徒たちの変化だけでなく、自校の取り組みがどう評価されるかを分析、検証することで、組織一体となって、試行錯誤しながら授業改革を進めている。



教員17年目 池田高行先生

現代文(3学年)

1999年から6年間札幌の私立高校の教員を勤めた後、2006年北海道立岩見沢東高校の定時制を経て、同年秋より同校赴任。3学年の学年主任兼学習実践研究部長。教員としてのモットーは「どのような生徒の才能も伸ばす努力をすること」。

**社会で求められる力に応じて
大学入試も変わろうとしている
それに応える授業が必要**



**教科を超えて課題を共有し
互いに授業を磨いていく**

同校の各教室にはプロジェクターが設置され、通常板書される内容は先生が事前に用意したスライドで、パソコンからスクリーンに映し出される。

今日の授業のテーマは評論文の読解。授業での目標を示し、前回の授業の振り返りを行った後、プリントの設問をまずは個人で考える。10分の制限時間が来ると、グループに分かれて考えを深めていく。

グループワークでは模造紙と、設問が書かれたブルーのカード、本文を構成する単語や短文が書かれたピンクのカードを配布。すぐにグループごとに自由に模造紙とカードを使った話

し合いが始まった。設問カードを読み砕きながら考えるグループ、単語が書かれたカードを並び変えながら関連

性を整理するグループ、単語ごとの意味を考えるグループなど解き方はさまざままだ。先生は教室を回りながら、残り時間を伝えたり、早くできたグループには「なぜそうなると思った?」と理由を説明させ、説明できなかったらもう一度考えるように促していた。

「答えの導き方にベストはなくグループ各々の考えでいいのですが、出した答えに対して説明ができなければ意味がありません」

最後の確認テストでは、全員がすらすらと書いていたのが印象的だった。

グループワークの教材の作り方や生徒への最低限の声がけなど、A型授業の進め方が絶妙に見えた池田先生だが、まだまだ模索中だという。

「A型授業では教員の事前準備が的確に整わないと生徒がうまく進められません。教科によって授業形式を変える必要もあるので、教科を超えた学年会議で課題を共有したり、学

教員9年目 吉田芝穂先生

数学I(1学年)

2007年に教員キャリアスタートと同時に旭川藤女子高校に着任。生徒が自分で考える演習を重視した授業を展開。モットーは「生徒が親しみやすい存在でいたい。けれど生徒が敬語を使わなかったり、『先生』と呼ばなければ返事はしない」。

**グループワークの効果で
生徒が「わからない」と
声をあげることができるようになる**

**1年生が自主的に放課後に
勉強を教え合い始めている**

因数分解の復習の公式をスクリーンに映した後、ミニテストから当日の演習問題など、時間を区切ってテンポ良く進んでいく吉田先生の授業。取材をした4月下旬、1学年は入学して1カ月未満だったが、先生が授業中にパソコンで演習の解答を共有フォルダーにアップすると、生徒たちはタブレット端末を使って難なく情報にアクセスするなど慣れた様子。

グループワークではさらに演習が続く。わかった生徒が解けていない生徒に教えるグループもあれば、それぞれが意見を出し合って考えるグループも



ある。制限時間が迫ると、「全部できた?」「私はできました」ではなく、グループ全員ができるようにね」と声をかける。

小林昭文先生からの アクティブラーニング型授業への アドバイス



産業能率大学 経営学部教授
小林昭文先生

1952年生まれ。空手のプロを経て、埼玉の県立高校教員として25年間勤務したのち、定年退職、2014年より現職。河合塾 教育研究開発機構 研究員も兼任。教員時代にカウンセリング、コーチング、アクションラーニング、メンタリングなどを学び、最終勤務校では物理のAL型授業を実現。現在もその研究と実践、啓発活動に取り組む。

私立高校の先生が、地域を巻き込んで 授業改革に取り組む姿に感銘

今回ご紹介した旭川藤女子高校には、昨年と今年の2回にわたり研修でお邪魔していますが、今年の8月にも3回目の研修で伺うことになっています。そもその出会いは、私が昨年札幌で研修を行った際に、宮本教頭をはじめ、5名もの先生がその研修に参加しにいらしたことで、並々ならぬ熱意を感じました。

昨年の秋の研修では、同校の先生方向けにお話をしましたが、今年の3月の研修では「近隣の学校にも呼びかけよう」と、100名近い地域の小中高大学などの先生方もお招きしての研修を行いました。通常であれば、こうした研修は自校の教員のスキルアップのために行うものですが、公立校ならまだしも、私立学校である同校が公私を超えた授業改革のムーブメントを起こそうとしていることに驚きました。子どもたちの未来のために、地域の未来のために、自校の利益を超えて動こうというその志の高さは素晴らしい



ものです。まさに「人生意気に感ず」です。同校とこの地域の今後に期待しています。

AL型授業の進め方の基本を紹介する、小林先生の新著「アクティブラーニング入門」(産業能率大学出版部・1500円税別)もぜひ参考にしてほしい。



「小林昭文先生の研修会でも生徒は結果を出したと聞き、やり方次第なのだと。時代の変化で2020年の大
学入試制度改革では、入試でも人と
協働できる力が
生徒には必要と
なりません。それ
養うのは総合的
な学習だけでなく、
教科にも求め
られているので
ないでしょうか」

校全体で授業見学会を行ったりして修正しながら進めています」

当初はA型授業が学力向上につながるのか疑問もあったそうだが、「小林昭文先生の研修会でも生徒は結果を出したと聞き、やり方次第なのだと。時代の変化で2020年の大

学校をあげての授業改革に、吉田先生は当初戸惑いもあったそうだ。「私はパワーポイントを使ったこともなかったですし、1時間の授業の準備に3時間くらいかかりました。また、50分から70分に授業時間が伸びたことに、生徒が耐えられるのかと。でも、数学は演習によって知識が定着するため、生徒が授業内で教え合って演習ができる時間が増えることは良いと思いました」

「始めて1年余りのA型授業だが、生徒たちにも効果の兆しが見え始めているという。」

「講義中心の授業の頃は、1年生の4月の段階ではまだ人間関係ができ

ておらず間違ったら恥ずかしいという意識が強く、授業中に挙手をする生徒はほとんどいませんでした。けれど今年の1年生はグループワークに早くから慣れているためか『わからない』と言えたり、放課後に自主的に残って勉強を教え合ったりしているのです。また、グループワークは時間の流れが早く感じるようで、50分授業の頃から在籍している3年生が『もう終わるの?』と言ったときには『よし!』と思いました」

吉田先生の理想は、先生が授業に出られない事情があったときでも、生徒が自分たちで授業を進められる状態になることだという。

「そのために、生徒たち同士の学び合いがもっと活発にできるように工夫していきたいです」

